

近世紀行文学の要素

序

近世紀行文学は、量の多さもさることながら、その形式や内容の多様さが、研究の発展をはばむ一条件ともなっているようである。それらすべてに共通する方法論を求めようとするのは、不可能であろうし、評価の基準を軽卒に定めることもまた賢明ではあるまい。しかし、これらの作品の一つ一つにふれていく際の、いわばめやすとして、いくつかの視点を持つておくことは、無駄ではないと思う。

以上のような理由から、近世紀行文を含む文学的要素といったものをいくつかの項目にまとめてみる。一、古い先行文学の利用、二、現状報告、三、自己表出、四、生活描写、五、文章美、などである。このような点を注目すれば、おおむね近世紀行文の各作品及び全体像といったものが、把握されていくと思う。

これらの項目は、相互に関連する点も多い。用語にも、不適当なものがあるかと思う。しかし、現実の近世紀行の各作品を調査研究していく上で、最も自然にあらわれてくるかたちということを心がけて、このよ

うな項目とした。これらの項目にそって、近世紀行文の持つ特色、限界にふれ、この種の研究における問題点も、あわせて考えてみたい。

1

近世紀行文の第一の要素は、かつて物語や和歌、古い紀行なので知っていた土地を、現実を訪れることができたという感動の表現である。

このようなとき、利用される作品は、源氏、伊勢、土左、海道記、などが圧倒的に多い。また、軍記物と、俳人関係の紀行では芭蕉の俳文がそれらと並んでよく引用されている。

いうまでもなく、このような古典作品と現実の土地との結合によって効果をあげようとするとき、作者に必要とされるのは、その土地にまつわる古典の記事に関するゆたかな知識と、それを現実の旅と巧みに結合させて、一つのイメージをよみ手に与える筆力であろう。

しかし、多くの場合、紀行文の作者たちは、その点をあまり意識的に追求してはいない。全体の構成にも心を配らず、知っている限りの知識をむづろさに羅列する。

板 坂 耀 子

(一九八四年九月一〇日 受理)

芭蕉などの作品のように、ごく巧みに工夫されない限り、作品全体の完成に、さしたる効果もたらさない、このような古典への傾斜が、これだけ根強く、近世を通じて紀行文全体を支配しつづけた理由は、おそらく、紀行文作者の大半が、一応の文学的知識を備えた人々であり、旅先の土地について知る情報のほとんどが、何らかの文学作品を通じてであったことに起因するであろう。

紀行文は、一定の文章力があれば一見、創作しやすい文学である。しかし、気ぜわしい旅の間に、後の紀行文制作に役だつような克明な記録をとっておく、あるいはそれと同様の記憶をたたみこんでおく、という基本的な作業の苦勞¹はさておいても、いざ記そうとすれば、綿密な注意力、観察力、自分自身の心理描写、美意識、等が必要とされてきて、それほどたやすいものではない。

紀行文は自照文学の一部であり、職業作家といった存在もない。多くの人々は、心おぼえや、手すさびのために、記した。したがって、それほど必死の努力や工夫をする必要は感じていない。旅の思い出を、せいぜい自分のなぐさめのためにまとめあげる最も安易な方法は、従来の紀行のパターンを踏襲することであり、文学性を備える最も簡単な方法は古典作品の記事を並べておくことであった。近世紀行の場合、一見非常に文学的な作品が、実は大して文学的に努力を重ねられたものでなく、常套的な美文による無味乾燥な記録にすぎないという逆説めいた現象はこうして生じてくる。

古典作品を利用するこの姿勢は、ただし、時代が下るにしたがって、単なる感情移入から、もじりや笑いへ発展したり、あるいは「蝶の遊」『秋山の記』に見るように、一つの作品に徹底してかわり、奇抜な着想をくり広げるといった工夫も生んでいる。

註

- 1 旅の記は、具体的にどのようにして書かれたのであろうか。当時の旅行者が出行に際して所持するものの中には、「紙子」一衣は夜の防ぎ、浴かた雨具墨筆のたぐひ（元禄二、松尾芭蕉、「おくのほそ道」のように、筆記用具が必ず含まれた。宝暦十三年刊「雅遊漫録」（大枝流芳）には所持すべきものの中に「紙（連綴紙） 巾箱本（コボン） 途利（ハットク） 硯匣（スズリ）」とあり、文化七年刊「旅行用心集」（八隅景山）は、「道中所持すべき品の事 一 矢立 扇子（中略） 日記手帳二冊（下略）」と記す。「日本旅行史」（吉田十一氏）が引用する「大日本順路明細記大成」（弘化年代）にも「他方へ赴く時用意ノ品々大略。衣類。脇指（中略）。矢立。手拭。鼻紙。道中記。財布。心算ノ手帳（下略）」とあり、覚書のための手帳が欠かせないものであったことがわかる。それが使用されるさまとしては、たとえば河竹黙阿弥『萬紅葉宇都谷峠』（安政三年九月市村座初演）の駿州鞍子の宿での場面で、「トこのうち仁三日記帳をつけている。十兵見て、十兵『もし、そこに帳をつけておいでなさるお方、お前様はどちらでござりまする。』仁三『はあ、わていでござりまするか、わていは京都下立売松原上がる所で、小間物を商売いたします仁兵衛と申すものでござります』熊『もし、京のお方え、帳はいつでもつけられらあ、ここへ来て話でもしなせえな。』仁三『は、ありがとうおますが、日記をつけますゆえ、その晩につけませぬと、ついつけ落してなりませぬ。（下略）』などからもうかがわれよう。あるいは清田膳更「孔雀楼筆記」中には、大変快い旅宿に泊まった思い出を記して、「ソノ時ノ旅食帳ナルモノニハ、ソノ主ノ名アルヲ、随筆ノ冊子ニウツシヤカムト思テ因循セシ内、カノ帳ヲ失ヌ、残念ナルコト甚シ。」とあって、この旅食帳も同種のものであろう。渡辺華山が『游相日記』（天保二）で、旅泊のさまを記して「卯刻とおもふ頃、おき出づ、日記をしるす。夜明く。宿借る人の、たはこはたく音、しはふく声、くるま井、膳すゆる音、きなき女の、梅干そえたる土瓶持出で茶供するなど、たひのけしきなり。」と記すのも、『日本九峰修行日記』巻二、文化十一年正月十六日の条で野田成亮が「雨天。滞在。終日日記書写す。」、十一月六日に「雨天。據なく滞在日記書写し其外拵へものする。」と記すのも同様である。後者には別に文化十一年三月廿五日の条に「夜に入り隣家の者多く旅中日記聞きに集る、」

七月六日に「夜に入り近所の衆日記聞きに来る」、文化十二年二月二日に「隣家の者日記読聞きに来る」、七月十一日に「夜に入り近所の衆多く日記聞きに来る」との記述もあって、旅の途中ですでに人々の興味の対象だったことがわかる。このような走り書のメモをもとに、後に紀行文が制作されてゆくこともあるわけである。しかし、旅の疲れの中で日々の記録を記すのは並大抵のことではない。自らも『春のかり』他、二十点余の紀行文を記した中島広足は「かいのしづく」(寛政八、鴨祐為)の序に「旅路の日記は後にとうでゝ見るに、其をりのことども、目のまへにうかびきつゝ、いみじうこゝろなぐさむるわざにて、としおいてのみなどは、ことにむかしゝのぶくさはひなるを、それとり見る人、はた心をやりて、うらやましくも、をかしくもおぼゆめり。しかはあれど、旅路にもものするほどは、なにとなく心もものどやかならず、舟のうちのいぶせきには、筆とることは物うくて、しるしとゞむること、まれなるを、此一とちは、杉山の翁のまめなるこゝろより、何くれと朝ゆふのことどもを、もらずものせられたる、げにまたなき、後の心なぐさになむ」、また「東路日記」(小山川蔭、弘化四年)の序にも「おほやけ、わたくしにつけて、わかき時より東路行かひしは、十たびばかりにや成ぬらむ。さは、行手のすさびにいさゝか筆をとりてものせしもあれど、道のつかれには、はかしくもえものせざりしを、此小山ぬしの日記は、さるはるけき海山のたゞずまひ、のこるくまなく書しるし又所につけ、をりにふれて、よみ出られし歌ども、いとおもしろく、ふるごとさへ、何くれと考へあはせられたる、いにしへのぶ心の、おほかたならぬほどもしられて、いかでかくまでとはなむ、うちおどろかれぬる」と、ともに、旅の途次に記録をとめていくことの困難さをあげて、評価する。更に本居宣長の書簡中にも「一 去冬上京之記仕候哉と御尋ニ御座候へ共此度ハ道ノ記も得書不申候 道中ノ詠 近江の石部驛にやとりけるつとめて道にてよめる 朝立て比良の高根の雪見れはきその夜床ハうべさえにけり 京より帰るさに鈴鹿の板ノ下ノ驛にやとらむとする夕に 横さらふ蟹か坂路を夕こえてすゝかの山はくれかはてなむ」(『名家手簡』八集下)とあって、紀行文を期待されながら記すことができず、道中の詠歌のみを記している。いずれも旅をしたからといって、ただちに紀行文が制作できるというものではなかったことが推測できよう。

2 「蝶の遊」(山崎北華、元文三)は、「おくのほそ道」のあとを正確にたど

り、松島で夢中に芭蕉と問答をかわす。『秋山の記』(明和安永頃、上田秋成)は播磨、丹波方面の紀行であるが、源氏物語論を行きあった僧の口を借りて語るなど独特の工夫がなされている。

2

第二に、近世紀行文が持つ要素は、旅先の土地そのものに関する現状報告である。

この傾向の源は、近世初期の地誌、名所記類、更にさかのばれば、延喜式、風土記などの記事に見える、各地の風物に関する紹介であろう。そして、近世を通じて盛んだった、道中記、名所図会類とも関連して発展する。

俳人間における芭蕉紀行の影響を除けば、近世の人々に最も歓迎された読まれた紀行文は、具原益軒の紀行類、橋南谿の「東西遊記」、古河古松軒の『東西遊雑記』など、いずれも、この要素を強く備えている。

前述のように紀行文は、職業作家は持たないが、この種の紀行文を記す人の多くは、紀行文の専門作家といっていいほど、旅なれしており、土地に関しての知識が豊富である。もちろん、書物の上から得たものだけでなく、実際の調査、行動を通じて、積極的にそれを採用する。土地の人々の話を多くとり入れるのも、この人々の特徴である。

正規のルートをはずれることも多く、探險記、冒険記といった印象を与えることもある。紀行文の一つの宿命として、従来苦しい旅だった地域が、交通の便によって往来が比較的自由となると、ちがった雰囲気気の紀行文を記すか、新しい「へき地」へと足をのばすしかない。常に新奇なものを報道し、伝達するという、この要素を備えるには、後者を選ぶ方が便利なのである。

当時の人々が、このような紀行を文学と考えたかどうかは不明である。しかし、新しい知識の源泉として大いに歓迎したことは、書肆の広告等からも、うかがうことができる。

だが、少くとも作者たちの側には、この種の記事を記す場合、正確さと面白さのどちらをとるかについて、相剋はあったようである。紀行文には文学論争といったようなものはないし、相互批判のようなものもないが、あえてあげるなら、南谿の「東西遊記」が事実とくいちがう、あるいは観察が不十分であるとして、しばしば批判され、特に古河古松軒は、明らかに対抗意識を見せつつ、その記事の不正確さについている。

南谿の反論はなされていないが、彼の「東西遊記」の面白さは、事実云々よりも、その少々誇張した、平明な表現にあって、それが多くの人々にうけいれられたであろうことは疑いをいれない。逆に、古松軒の姿勢は非常に科学的かつ良心的で、正確を記すが、読み手に面白く伝えるという努力は必ずしもなされていない。

わかりやすさを、文章を書く条件の第一とし、紀行文をその論理にしたがって記した益軒や、全作品をあくまで雅文調でつらぬこうとしている菅江真澄⁷などは、それなりの工夫もしていたといえる。しかし、それを評価した例は、ほとんどないといってよい。

南谿や益軒の読み手は、彼らの文章の自然さ、平明さに、魅せられてはいたろうが、それを評価することは考えつかなかった。批判や評価は、その内容に限られた。現状報告というこの要素は、いわば実用的なものとして考えられ、それにも文章力、文学的才能が必要ということとは、かえりみられなかった。当時の読み手の文学観としては、それは、やむをえない限界であったろう。

なお、このような要素は部分的には、多くの紀行に見られるが、正確

な、豊富な内容を備えたものとなると、やはり、上記のような作品類に限られてくる。

註

- 3 芭蕉と並んで元禄時代「諸州巡覧記」「木曾路記」をはじめとする多数の紀行文を制作した。拙稿「貝原益軒の紀行文」(語文研究34号)を参照。
- 4 前者は寛政七十年刊、後者は天明三十八年成。
- 5 拙稿「古松軒の林子平批判」(近世文芸31号)参照。
- 6 拙稿「貝原益軒と紀行文」(愛知県立大学文学論集28号)参照。
- 7 本名白井英二。東北地方の紀行文を多く残し文政十二年歿。

3

第三に、自照文学である紀行文においては、作者でもあり主人公でもある自分自身を、作者がどのように登場させ、活躍させていくかという問題がある。

地誌と紙一重のような益軒紀行では、作者がほとんど登場しない。しかし、これは極端な例であって、地誌的な紀行でも、大抵はやはり作者が、読み手にそれとわかるように行動している。

紀行文学で、作者について読み手が知りうる、作者が読み手に伝える手段には、次のようなものがある。

まず、冒頭に、自らの環境、状況を説明するものがある。しかし、これは多くの場合、「海道記」などの模倣であって、後につづく全編と緊密に呼応しているような作品は少い。

また、旅の途次でさまざまな人物との交流を述べて、作者の社会的地位、状況などが伝えられるものもある。だが、これはむしろ、記録、心算的なものが多く、いたずらな人名の羅列にあって、紀行文全体の

流れと、異質になってしまうことも多い。

近世の紀行文で最も目につくのは、旅先での、さまざまな事柄に対する作者の意見の羅列で、これもまた、作者の個性をよみ手にしのぼせる重要な手段である。耳目にふれるさまざまなものに対して作者自身の見解を述べるには、すぐれた個性、一貫した哲学が必要である。近世において成功をおさめ、よくよまれた紀行の多くには、これがある。

以上はいずれも比較的、副次的な自己表出の方法である。もっと意識的に自らの行動をいわば演出して、紀行文全体の構成を、自分という人物像中心に作り出そうとするものがある。このような作品では、全体にわたって、作者の感情や行動が、しばしば描写され、よみ手がそれに注意をひかれるようにされている。

その場合、作者が自分を演出する方法にも、むろんパターンがいくつかある。女性紀行に多くみられるように、古い紀行や物語の雰囲気にととって、旅を苦しいものとし、そのうれいに沈む自分の姿を示そうとするものも多い。芭蕉をはじめとする俳人たちは、中世連歌師の旅を念頭においているといつてよい。また、旅の中のさまざまな危険、困難を、いかに機敏に判断を下して処理していくかという行動的な主人公に自分を擬するものもある。¹⁰

この最後のかたちの主人公の活躍は、近世紀行の一つの特徴である。かつて苦難であった旅が近世では娯楽化するものの、旅はまた常に一つの冒険でもあって、軍記物ほどではないにせよ、スケールは小さいにせよ、「英雄」が誕生することもできる。軍記物の題材が失われた近世に天変地異ものがそのかわりをつとめたと中村幸彦先生は指摘されたが、その一端は紀行文にもなったというべきである。

ところで、この人物描写の面で、近世紀行文が、もっと開発してよか

ったろうと思われるのは、旅をしている仲間どうしの人間関係である。

旅が苦難であった時期には、同行者の集団内には、かえって共通の心情があり、結合があったろうが、娯楽化していけばいくほど、旅に望むものも人々は多くなり、同行者内の気持のゆきちがいがいも、気のゆるみと、わがままとから、多くなっていくはずである。しかし、そのようなものを描いた紀行文は、皆無といっていい。野田成亮の、『日本九峰修行日記』における同行者への悪口、土屋斐子『旅の命毛』中の従者への悪口など、数えるほどである。¹¹

そもそも、同行者や、自分の属する集団の構成について記したものが少い。記してあっても大まかである。一人で旅をしたものはあまりなく、最低一人から数人の従者はつれていたのであるのに、それについて語ることがないため、うっかりすると、一人旅かと錯覚しがちである。同行者をうまく演出させている作品が少ないから、旅の途次での人々との交際が、妙にそこだけうきあがってしまうということもある。

南谿の作品や、幕末の花見記的なものの中には、仲間や従者がかなり巧みに点描されるが、それらはすべて、調和を保った楽しいものである。巧みに点描されるが、それらはすべて、調和を保った楽しいものである。巧みに点描されるが、それらはすべて、調和を保った楽しいものである。巧みに点描されるが、それらはすべて、調和を保った楽しいものである。¹²

これは、紀行文の制作状況にも関連するであろう。同じ自照文学でも日記文学と異なり、近世紀行文学は、自分の後の思い出のための記録と故郷の人々への土産話という目的をもって書かれたものが多かった。どちらにしても、苦々しい思い出が書かれる可能性はない。彼らが描こうとしたのは、旅という特殊状況の中であらわになる人間性の真実などではなく、自らも、知人たちも、楽しく読みかえせる、文字でつづられたアルバムであった。この方面の開発がなされなかったのは当然である。旅をする人々がふえるにつれ、何らかのかたちで、そのようなものを描い

た作品への欲求も、たかまっではきたにちがいない。しかし紀行文の作者たちは、それにこたえる危険をおかすよりは、楽しい旅の思い出を、綴りつつける方を選んだ。その結果は、自己表出、旅人（作者）の個性の描写という点で、ぎりぎりの表現を生むことはついにできなかったが、作り手やよみ手にとっては、それでよかったのである。

註

8 「我身奥州信夫の里の片傍に、心なく月日を送る者なりしが、叶はぬ渡世に支られ、心に任せぬ旅の身と成る。」（寛永二十 徳永種久？『東めぐり』）、「千年山の麓小口の里に、身をやうなきものに思ひはふらしする優婆塞ありけり。若かりし程は玉敷の都の内呉竹の園生に遊びて、短き官位にほだされつゝ、世を暇無うのみ送り過し侍りしが、常に帰隱の本意深うして、終に六十の秋を迎へておくれたる住家を占め、坐禪読誦の窓の裡に世の中の無常を悟りて、如露亦如電の観をなし、身の上の有為を厭ひて、遠離諸幻の念を凝す。独處山林は法華の妙文、制心一處は道教の金句也。されば隱居の師友は、佛の道に勝りたる事あらじと思ひとりて、律の戸さしをさへ搔も拂はぬ身の、はからざるに今年の春弥生の初、通々と東行を企てり。」（元禄十一 安藤朴翁『常陸帯』）、「天さかるひなの住居に、世をうしと思ひをりたる軀あり。心は早う世はなれたれど、さすがにうからやからの多くて、そむきはてゝとし月を送る。龍の智あるも醴を経ぬ。龜の靈なるまた割をのがれず。生あるものゝ智あるもおろかなるも、ひとく浮沈いかでのがればや。泥土にまみれ俗風にそむ習ひなれば、身のいさぎよきをもほりせず、栄ゆべきをも思はず。香潭をも攀ぢず、世途にも委せず。むなく中間にまよひて志の終へざるをかなしむ。」（文化四 土屋斐子『旅の命毛』）、「今はむかし、つくしの国に、こしかままりたるふる翁ありけり。すむ所は、肥前国、彼杵郡、長崎の里になむありける。もとよりかたくなしきるなかにて、さるくづをれたる身にも野山をありくことをなん、いみじうこのみける。」（嘉永末 中島広足『雲のしづく』稿本、など。これらの多くは、『海道記』（貞応二 源光行）冒頭の「白河のわたり中山の麓に閑素幽栖の佗士あり。性器に底なければ、能をひろめ芸をいるゝにたまるべからず。身運は本より薄ければ、報を

はぢ、今をかへりみて、恨をかさぬるに所なし。徒に食泉の蝦蟇となりて、身を藻によせて力なき音をのみなき、空しく窮谷の埋木として、意樹に花たえたり。惜からぬ命のさすがに惜ければ、投身の淵は胸の底に浅し。（中略）然る間、歳の水早く流れて、生涯はくづれなんとす。留むとすれども留まらず。五旬の齡の流れ、車坂に下る。（中略）去年質耳外に聞なして、おほくの歳をわたり、舌の端唇して、いくばくの日をか送るや。心の船洋為に漕ぎ、未だ海道万里の波に棹さず。乗馬あらましに馳す、いまだ関山千程の雲にむちうたず。今便人の芳縁に乗じて、俄に独身の遠行を企てり。」にならう。なお、『海道記』の影響は『装遊稿』（元禄十三 服部嵐雪）の冒頭「星離れ鳥快き晨、鉄鞋を踏んで躍り出たり。掛羅を肩にやすめ、拂子を後ろにわがぬ。長明が海道記一帖は、荷ふに重しとせず。意馬に鞭をかなでゝ、独歩の伊達者となれり。彼一帖を見るに、便の人の芳縁に乗じて、俄に独身の遠行を企てり。貞応二年卯月上旬、五更に都を出て、一朝に旅立つと書けり。折節の能く似たれば、先達に頼みて所々の指南とせんが為なり。」にも明らかである。

9 拙稿「近世女流紀行文学の性格」（語文研究41号）参照。

10 安永四年「佐渡日記」（旦水）で海が荒れた船中で、旦水は自身を次のように描く。「日暮れたれば、下の五日の闇、汐のみ底に光る。船子の云。斯う闇夜と成りて、此海面の覚束なきに、行る方猶危し。さればとて舟は小さし波は高し。爰に泊べき術あらじと、ひた敷になく。旦水船の上聊か心得てあるが、声を怒らし、未練の船子哉。あれ見よ。三ッ連たる星に当て行らんには、磯輪必ずはぐるべからず。押せや／＼と、舷叩きてをたけびをす。兎角は分ねど、励まされて押行る程に（下略）。また文政元年「中空の日記」（香川景樹）で景樹は「己れ麓を望みて曰く、関の昔も懐かしきに、いざ彼の見ゆる磯辺に下りて、岩根伝ひの古道を行かんは如何に。荷負へる男子が曰く、然らば、後なる倉澤よりこそ下り給ふべけれ。目の下にこそ見え侍れ、此峠より下る事は最難かなる業にて、固より然る道も侍らず。縦や下り立ち給ふとも、親知らずの辺りは、この程くえ入り侍りて、伝ひ行く事いと辛く侍りなん。己れ曰く、扱こそは関守の波のかひはありけれ。いざや先づ分け試みんとて、荷など物せさせて、孝一をは先へ遣はし、節親民二人を率ゐて、直ちに踏下る。小松高茅限りもなく茂りなだりて、更に道なき物から、嶮しくもけはしければ、さる茂みに障りつゝも、一人ぞすべり行く。

(下略)と、美景を見るために崖をすべり下りようとして、失敗した体験を生き生きと描いている。この種の叙述は他にも多い。

11 『旅の命毛』には、「くだりはて、横ぐらといふに休む。昼のおしものなど人々しばし時をうつす。わらべ海草の白き赤きをうる。姿はみるめにひとしきつゞれうちきたるが、いとをしくて、あれ多く求めよといへど、かゝるものを何にかとてきゝもいれぬ従者のいとくし。」「池りうには、かのはるゝ来ぬる在中将のハツ橋のふるきあともあなれど、忍ぶばかりにむなしく過行くこそくやしけれ。よろづ所を得てもあつかふ、従者などいふもの、あはれなるをと思ひやらず、みやびなる心もなし。さるほどにこなたは優に思ひしみつ、哀にもおかしうも見過しがたき所をば、何とも思ひたへず追立ゝあらがひてはしらするを、又人多くてきたなき者どもうちつどひ、がやゝと雪りがちに、酒のみ物くひなどする所こそ見るもうるせく、はやう打過ねと思へば、おのれはあみゝと口ひきたれ、鼻いらゝきてをるぞかし」などと、従者への不満が述べられる。また『日本九峰修行日記』は日向佐土原の修験者野田成亮の、文化九年から文政元年にかけての六年間の名山巡拝記であるが従者の平四郎に対して「平四郎は夜に入り帰る。札拵へたるやと云ふ、左様ならば出る時に申合せ置くべきに何の用談も無し、故に予は早く帰り出立の用意したりと云ふ。札もなきことなれば其位のこととは心得も有るべき筈と平四郎云ふ、其位の事は存し居りたれど肥前の呼子にての様な仕方方方にては却て心よからず、喧嘩に成りても宜しからず因て態と扣へたりと云へは少し不沙汰なり。」「早々に仕舞ひて配札に出る筈にて衣体したる所、平四郎蒲団打かぶり臥したり、今日は配札に出ずやと相尋ねたれども返答もなき故に予は宮崎と言ふ弁天に参り、焼物籠を見物し、夫れより金毘羅に詣づ。」「夜に入り湯場にて平四郎云ふ様、当所は今晚一夜にて明日出立すと、何が機嫌に入らぬやらしらず。五日 晴天。今朝は平四郎機嫌直り今日滞在と云、日夜心の狂ふ事也。」「平四郎百軒計り托鉢の由、予が足痛にて托鉢出来ざれば少し言葉付かはりて聞かる、客の一字思ひやらる、夫よりイグシへ出で先日一宿したる七左衛門宅へ宿す。我れ貰ひし米少なき故明日は六ヶしゝと平四郎云ふ、予は少しもかまはず、可笑しく思ふて居る事也。」「今日堤を一所に廻る筈の處平四郎何思ひけん堤の内に少々村あり、此方へさつゝと行く、予は堤を廻り托鉢す。(中略)平四郎は何れに宿したるやら知れず。」「日も夕陽なる故宿求めたる所、平四郎何が機嫌に入らぬやら其

宅をさつゝと出たり。夫よりして脇方へ行き、廿軒計りも求めたる所一軒もなし。」「此所四の宮とて大社あり。予納経したれば平四郎氣に入らず、二の宮三の宮は如何するやと云ふ、吾れ返答せず。」「平四郎夕方帰り自分には宿借りたり、予には何れぞと云ふ、吾身帰り早ければ当所出立せんと待合せ居たりと云へば、勝手次第と云ひ捨つる所へ早助本家の浅吉と云ふ方より、今晚は宿やらんと云ひ来れり。捨つる佛はなしと云ひ一宿す。」「且平四郎又病氣也。因て予情ら以ふに人間の病めると云ふは医書にも飲食色欲七情の侵す所より生じとあり、又風寒暑湿は肉身なれば誰れも受くと聖りとも仰せ置かれたれど、此度回国にて始終考え見るに、第一氣より生ずる也。心氣健やかにして少しも人慾の私しなく、妄想なく、無慾無心にして心氣無滞時は体中大川流るゝが如く、晴天に朝日の出る氣色なれば外邪の入る所なく、飲食の品も滞る事なし、因て病めると云ふ事なきは必せり、人慾の私のために無理に心氣を遣ひ、体を動かす時に於ては邪氣忽ちつけ込み大病となるなり、因て折々病を生ずるも耻かしき事にあらずや。可憐々々。」「と、不和の様子を描き敵意をあらわに示している。

12 芭蕉は「おくのほそ道」中で、同行者曾良について「曾良は河合氏にして惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の勞をたすく。このたび松しま・象潟の眺共にせん事を悦び、且は羈旅の難をいたはらんと、旅立曉髪を剃て墨染にさまをかえ、惣五を改て宗悟とす。」「とかなり最初の部分で紹介する。また橋南谿は「東遊記」後篇卷二「養軒が詩」で、同行の若者養軒について詳述するが、これも好意をこめたものである。近藤芳樹「梅桜日記」(文久元年)では同行者大槻寿信が効果的に使われており、冒頭で「うらゝと霞み渡れる空に催されて、そことも知らぬ旅寝のせまほしきものから、難波のすまひも、まだ一年にだに足らねば、思ふどちと言はんばかりの友もなし。いかゞはせん、かう長閑なる春の日を、ひたやごりに、窓の内にのみ過さんも、むげの至りなりと、俄に其いそぎどもして、大槻寿信をそゝのかすに、いなべる氣色にもあらねば、まづいと嬉し。さるは二十にもみたぬ男ながら、しめやかなる本性にて、書よみ歌作る方の才しかく、およすけたる若者なれば、なかゝにさとびたらん大人よりはと、誘へるなりけり。」「とあるように、全編仲むつまじいのどかな旅である。そして、このように同行者がクローズアップされる例は、紀行文全体の中では非常に少ないといつてよい。

第四に、旅そのものの雰囲気をごとまで表現できるかという点がある。

ところが、古い紀行をまねた作品でも、地誌的な作品でも、この点はおかしいほど欠落している。まず前者は、古い物語や紀行と一致できる面ばかりをさがすため、現実の旅において、それと矛盾するようなものは決してとりあげて書こうとはしないし、後者は、土地の風物などへ対する公的な記録を客観的に記していこうとするあまり、私的な記事は少くなる。

みずからの旅の実態を克明に記すことにどれだけ価値があるか、多くの紀行文作者は、考えていなかったようである。

したがって旅の苦しみは、古典紀行になぞらえて、必要以上に大げさに語られるか、私的なものとして無視されるか、あるいは何でもかいておく記録の一部として冗漫に記されるか、のいずれかであって、それを巧みに取捨選択して、新しい旅の姿を描き出し、作りあげていこうとしたものは、実に少い。

俳人、歌人たちは、全体の雰囲気をこわさぬ程度にまではとりあげることが、きわめて姿勢は、用心深い。旅の生活を描写するよりも、全体としてまとまった紀行を作り上げようとする意識の方が、先行する。

その結果、旅の実態を知ろうと思えば、紀行よりも、旅についての注意書、心得の箇条によった方が早いということにもなる。それらに示される荷物の片づけ方、馬方とのかけひき、足の豆の予防、などが印象深く記されている紀行文は、知る限りでは、ない。

俳人たちの紀行には「旅の賦」「旅論」¹³などの俳文と共通する、旅の

生活を描写していこうとする姿勢があるが、それも結局は、新しい美の世界を確立し、新しいもののあわれを作りあげようとする意識にもとづいていて、題材は用心深く撰択されている。

紀行文というものが、どういうものであるか、作者自身にもはっきりしないまま、多くの紀行文はつづられた。古い形の紀行文を踏襲する作品類に対して、新しい地誌的紀行文が持った自らの存在理由は、知識の伝達という実用性であった。文学的ではなかったかもしれないが、やはり高級な読みものという点では同じだったのである。その中で、旅の実態を記すなどということは、何の価値もあるとは考えられなかった。古典紀行と共通のものを近世の旅の中に見出させるのに役だつ時のみ、それらはとりあげられ、記された。しかし、旅を本当に好むということは、このような旅の生活実態をも、また愛することである。巧みにそれを文学的な文章の中にとりいれて喜んでいた大田南畝や、単に記録として精細にかきつづった野田成亮などがそれを示している。また、幕末に蝦夷紀行を多数記した松浦武四郎の場合は、報道性、知識伝達性という大義名分が、旅の実態の描写と結合した、作者にとっては、さぞ幸福であつたろう例である。しかし、おおむね、旅の実態の描写は、自己表出における同行者の描写と同様、近世紀行文学の一つのとりおとしであった。虚構と笑いに名をかりて、やがて「膝栗毛」¹⁵が、みごとにそれをさらう。その空前のブームは、大量の紀行文の長い歴史の中に、もっともよみたいものはよませてもらえないできた多くの旅マニアたちの欲求不満の爆発なのではなかったろうか。

註

13 「旅ノ賦」は宝永三年刊「風俗文選」所収の森川許六のものと、天明七

文政六年刊「鶉衣」所収の横井也有的ものがある。「旅論」は「鶉衣」所収、也有作。

14 南畝の紀行は『改元紀行』と『壬戌紀行』。前者は享和元年東海道、後者は享和二年木曾路の紀行で、いずれも街道すじの風物、旅の風俗を活写している。

15 「東海道中膝栗毛」。十返舎一九、享和二、文政五年刊。滑稽本の代表作として広く読まれ、大原幽学の諸紀行など、紀行文の方にもこの影響をうけた作が存する。

5

第五に、紀行文の性質上、欠かせない主要な要素として風景描写がある。だが、大半の紀行文において、このような美景の描写は常套的であって、特に見るべきものがない。

古典作品に傾斜した作品では、そのような昔物語と共通する美景を、昔物語風の描写で描き出すのみであるし、地誌的な紀行においては、順位をつけたり比べたり考察におわる。

わずかに意識的な努力がみえるのは、女流紀行の精細な描写である。

その他、俳人、歌人たちは、風景美への感動は、挿入した句、歌に託し、あるいはさりげなく全体の文章の中にとけこませて、その部分だけをうきあがらせないように注意を払っているようである。

その他の紀行文では、美景として選ばれる場所も、使用されることはも常套化している。「絵のような」の多出も、その一例であろう。益軒、瞻叟が、寢覚の床に対する評価がくいちがっているのなど、珍しい例といつてよい。

美景の描写が常套的なのを悪いとはいえない。雑多な要素を含む紀行文中では、一つの風景にあまりに力をこめて筆をさくことは、全体を一

種の美文調でつらぬかねばならぬという枠もつくり、清新な描写をしてしまうと、かえって、他の部分とちぐはぐになることもある。あくまで、そこが、どのようなパターンの美景かということを、パターン化された文章でよみ手に伝えておくにとどめるということも、手法としてとられていたかもしれないのである。

その、パターン化された文章が、どうやって成立していくかは今後検討すべき課題だが、特に、名所図会類のそれに見るように、この種の文章は、軍記物の文体を利用しているものが多いことを指摘しておく。名所図会類には、ふつうの紀行文よりも、はるかに風景描写が多い。これを一つのカタログとして紀行文は利用し、読み手に、名所図会の一節を想起できる程度の数語の示唆をすれば充分と考えていた可能性もある¹⁷。

注

16 「木曾路記」(正徳三年刊)において貝原益軒は、「ねぎめの床は木曾川のきはにあり。大なる岩なり。岩のよこ十間、長四十間ばかりあり。其高き所に、弁才天のちいさき社あり。其一段ひき、石の上、平なる所、取分てねぎめの床と云。其大岩の岡のごとくなるもの、幾許といふ事をしらず。其上平なり。東の方は河原のごとくにて大石あり。水なし。西は木曾川ながる。ねぎめの床の大岩は、西の方木曾川にのぞみて、其石岸屏風を立たるが如し。むかへにも大岩あり。兩岸の間水のは二間、或は三間、瀬ありて滝のごとくみなぎりながる。大河かくのごとくせばくながるゝゆゑ、ふかき事はかりがたし。其両岩のせばき所、長五十間ばかり有。上の水の落口の岩を、上麓岩といふ。河中にまな板石とて、一の石あり。川むかひの大岩の上に三の穴あり。一の大なるを大釜と云。二の小きを小釜と云。皆そらにむかへり。むかひに屏風岩とて、屏風を立たるごとくなる岩あり。向の大岩の下のはしに、たゝみ岩とて、畳のごとくなる岩あり。又ゑぼし岩とて、ゑぼしに似たる岩有。其前に川のこなたに平岩あり。平岩の上に黒岩あり。其黒岩を象岩といふ。川むかへに岩山あり。其山に檜、樅、榎、松などしげりてうるはし。お

よそ此地他所のすぐれたる風景にもこえて、奇妙なる風景なり。いつくしく潔事、心にしるしがたく、ことばにものべがたし。」と、細叙し、絶讃した。これに対し、清田膽叟は「孔雀樓筆記」（明和五年刊）で、「寝覚ノ床ハ聞シニ劣レリ。サシテ奇トスルニ足ズ」と、まったく評価していない。なお、膽叟は同書中で「岐岨ノ小野ノ瀑布ハ、箕尾ニ伯仲スベシ。（中略）且原氏モイヒ及ベリ。」と記していて、寝覚の床も明らかに、益軒評を念頭において鑑賞している。

17 拙稿「名所図会類の風景描写」（語文研究38号）参照。

結 び

つまり、近世の紀行文は、自由で、安易な、個人の手すさびとして書かれたものが圧倒的に多い。そして、一応の文学的知識を持っている故に、そのパターンを適当に模倣する傾向と、内輪の文学であるために、あくまで楽しいものになしようとする意識とが、更に枠を作っている。

俳人たちの紀行文などは、それなりに綿密に構成された小世界の実験に、ある程度は成功している。

また、旅のマニアともいうべき人々が記した大部の紀行類は、文学作品としては評価されなかったが、歓迎され、広く読まれた。

しかし、前者もなお、従来の紀行のパターンをはずれないことに用心深かったし、後者も、自らの中に、新しい文学性を発見し、主張する勇氣をもたず、その努力もなかった。

近世紀行全体としては、古典紀行の模倣から次第に脱皮していくが、結局、旅でふれた現実すべてをぎりぎりまで描き出していくという点では、伝統と、実用性とが、交互にじゃまをしつづけた。

旅行者の人数が増加しつづける中で、紀行文は旅を充分に描ききれずむしろ、「膝栗毛」のような作品が、その要求にこたえる。

近世紀行文学は、多くの限界を持ったまま、その時代をおえた。しかし、その限界は、近世文学全体の問題点ともかわることが多い。一つの検討が必要である。とりわけ、最も大胆で、勇敢な試みがなされつづけた第二の要素を多く含む作品群についての調査は、急を要するであろう。